

今回は、守山市吉身の旧中山道沿いに所在する慈眼寺を紹介します。

慈眼寺は、山号を住吉山、本尊を十一面観音立像とする天台宗の寺院で、平安時代初期の建立といわれています。

本尊の十一面観音立像は秘仏であるため像容は分かりませんが、帆柱観音、あるいは船玉明神と呼称されています。慈眼寺縁起には、天台宗の開祖伝教大師最澄が自ら刻んだものと伝えられています。延暦23(804)年、最澄は天台法華宗の修学のため唐へ留学(入唐求法)し、天台教学を学び、大乘菩薩戒を受け、禅や密教を相承して翌年帰国します。帰国途中の海路で嵐に遭い、帆柱が折れて沈没しそうになったとき、最澄が十一面観音に祈願すると、尊像が海上に出現して嵐

が収まります。最澄は帰国後、航海安全の結縁として、折れた帆柱で海上に出現した十一面観音像を自ら刻み、帆柱観音と名付け、小堂を建立して像を安置し、寺名を慈眼寺とします。その後、織田信

長(延暦寺焼き討ちの際に焼失しますが、江戸時代に明神のお告げにより林中から観音像を得て、この観音像を安置する堂のほか、薬師堂、如意輪堂、地藏堂などの諸堂が現在地に再建されたと伝えられています。

現在の慈眼寺は、長年の風雨により損傷が著しかったため、地元有志の尽力により平成19年に建て替えられ、その際、薬師堂に安置されていた薬師如来坐像は琵琶湖文化館に寄託されました。琵琶湖文化館では、この坐像が虫食いなどにより損傷していたため

慈眼寺



保存修理を行いました。修理の過程で、この坐像は、江戸時代に脚部、台座、光背などが新たに補われて漆箔が施されていること、室町時代に素地の上に布貼り漆箔が行われていること、鎌倉時代に部分的な修理が行われていること、平安時代末期に由緒のある木材から彫り出されたものであること、この像の本来の姿は、木の聖性を意識して木の表面そのままに仕上げられ、精悍で厳しさに満ちた表情をしていたことなどが判明しました。

さて、慈眼寺は、式内社である馬路石部神社の神宮寺であったと伝えられています。しかし、『近江輿地志略』には東南約330竈に鎮座する住吉神社付近が元の寺地であると伝えてあります。山号が海上交通の守り神である住吉神に由来する住吉山であり、本尊は海とのかかわりがうかがえる帆柱観音(船玉明神)と呼称されていることから、薬師如来坐像は、本来は住吉神社の神宮寺の本地仏であった可能性が高いと考えられます。

日本全国で、重要文化財に指定されている如来(阿弥陀、薬師、釈迦、大日など)は693件あります。このうち滋賀県の指定件数は、全国の約2割を占める133件、うち、薬師如来は45件で全国最多です。このほかに、滋賀県指定が9件、市町指定が慈眼寺の坐像を含め34件で、これらの薬師如来は、平安時代まで遡る古仏が多いという特徴があります。

滋賀県に薬師如来が多い理由は、平安時代末に後白河法皇が集成した『梁塵秘抄』の中の「近江の湖は海ならず、天台薬師の池ぞかし、何ぞの海、常楽我浄の風吹けば、七宝蓮華の波ぞ立つ」という歌謡から知られるように、琵琶湖の存在と薬師如来を本尊とする天台宗の比叡山延暦寺の影響によるものと考えられます。

薬師如来は琵琶湖、帆柱観音は海と結びついた仏であることから、慈眼寺は、湖と海、水への信仰を今に伝える寺院といえるのではないのでしょうか。

(財団法人滋賀県文化財保護協会 藤崎高志)

湖と海、水への信仰伝える